
狩人物語

黒崎しのぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狩人物語

【Nコード】

N6478Y

【作者名】

黒崎しのぶ

【あらすじ】

イケメンで最強な主人公がHUNTERの世界にトリップ！
ネテロの弟子で、紅い閃光と呼ばれる少女ユキノ。
原作かき回しながら、悪い奴らをフルボッコにしちゃうお話。
オリキャラ多数！只今四次試験中。

設定とか

蒼迅ユキノ（あおはやゆきの）

女。 16歳。 162cm 43kg

激しく差別されていた一族の長の娘。

兄コウヤと共に、奉公に出される。

そのほかは、いずれ本編で明らかになります。

甘いもの大好き。かわいいものも好き。

幽霊、妖怪といったものが大の苦手。

感情をあまり表に出さない。

嫌いな人間にはとことん冷たく、好意を抱いている人間

には、とことん優しい。ブラコン。

人殺しはしない。

9：1の割合で男に間違えられる。

しかし、本人はそれにすら気付かないほど鈍い。

自分の見た目には疎い。

赤髪金目。細身で手と足が長い。主になぎなたなど、剣系の武器を使う。（基本は素手）

胸あたりまでに延ばした髪は、後ろで低い位置にひとつにくくっている。

首には、蒼い滴型のペンダントをつけている。

通り名・あだ名

紅い閃光

紅い貴公子

レッド・デビル

e t c .

ユキ

ゆきりん

ユキピー

おつまみ

e

t c .

念 特質系

全系統、100%引き出せる。

能力は、そのうち！すみません・・・たぶん知っている技なら繰り出せる
みたいな感じになります。

このほかには、オリキャラ設定など、載せていく予定です。

慌てて作ったので、誤字脱字があるかもです・・・。

Prologue

「ユキ．．．」

悲しそうな顔をしながら、俺を見つめる兄さん。

「何でお前が．．．こんなことに．．．!」

俺の手を握り、兄さんは泣き出してしまった。
兄さん．．．

「ごめんなさい．．俺にはこれくらいしかできないけど．．．」
はっとしたように顔を上げる。

「ユキノ．．!おい．．やめろ．．!」

俺の周りに風が起こる。
だんだんと俺の体が下から消えていく。

「ユキ!ユキ!．．．ユキノっ!」

顔の半分が消えた。

兄さんが必死で何か喋っているが、もう何も聞こえない。

兄さん．．．

「ありがとう．．．」

もう何も残らない。

拝啓。

「兄さん」

俺は生きてます。

元気にしてます。

だから心配しないでください。

俺は強くなりました。

ジンというハンターに拾ってもらって

色々な人に会い、色々教えてもらいました。

今日はハンター試験です。

俺は内部試験官というものをします。

兄さん。いつか会いに行きます。

次に会ったら、俺と戦ってください。

あの日のように、負けたりしません。

絶対に勝って見せます。

だから、会いに行きます。

たとえ、違う世界でも。

その日まで、待っててください。

絶対に会いに行きますから - - - - -

試験開始まで。その一

「ここかよ」

ある定食屋を見上げながら俺は思わず呟く。

ネテロ師匠からもらった地図ではここで間違いない。
でもなあ・・・『ハンター試験会場』。

本当にいいのか。

いつまでも悩んでられないので、俺はドアを開ける。

「いらっしえーい」

気前のよさそうな親父の声が聞こえた。

「ご注文は？」

俺は思わずニヤける。

「ステーキ定食」

びっくり、と反応した。

そんな露骨に反応しちゃダメだろ。

「焼き方は？」

「弱火でじっくり」

そう告げると、かわいい女の子が部屋（？）まで案内してくれた。
ウィーンと音がし、ゆっくりと動き出すエレベーター。

少し、重力感覚が狂う。

「お、食っていいのかこれ」

用意してあったのはおいしそうなステーキ達。

俺はフォークを突き刺し、大胆に噛みつく。

無我夢中でほうばっていたらチン、と音がし、止まる。

「ついちゃったか……」

まだ途中だったステーキを何とか口に詰め込み、残ったステーキを名残惜しいと思いながらエレベーターを出す。

今年はいいい人材がそろつてると思うんだよなあ。

何でわかるかって？そりゃあ勘だ。

だってはいった時の空気が俺のときと大分違うし。

そういや俺のときって、俺も含めて二人しか残らなかったんだっけ。確か、シャル・・・シャルナークといったかな。ま、なにせよ

「これからが楽しみだ」

試験開始まで。その二

「ユキノさん」

「うはいっ!？」

いきなり声をかけられ、俺は思わず情けない声を出す。
周囲の人間は振り返り何事かと俺らを見つめる。
なんだよこの羞恥プレイ。

「ユキノさん・・・大丈夫ですか？」

マーメンだった。いきなり声かけんなよ。

「ごめん。間抜けな声でた」

マーメンは苦笑いをしながら、番号札を渡してくれた。

「109番・・・結構遅かったな」

番号札を胸のあたりにつける。

まあ、しょうがない。その前に師匠に頼まれた（押しつけられた）
仕事を

たくさんすませてきたのだから。軽く五力国は回った。

しかもあの狸爺・・・乗り物使ったら即爆破じゃぞ とか言いながら
念で爆破装置つけやがって・・・!あ、もちろん徐念した。
俺の能力で!

なんか、イラついてきた……。

「おい兄ちゃん、俺トンパっていうんだけどよ、お近づきのしるしに乾杯しねえか？」

「うさんくさ」

声出ちゃったけど、いいか。

でも、心なしかトンパがおろおろし始めた。

もしかして凶星だったり。

なんか不自然で怪しいな。

よし、鎌をかけてみるか。

「それってホントに何も入ってねえの？なんか変なおいすんだけど」

もちろん嘘。むしろ今、鼻詰まって何もおいしくないし。

「な、なんにもはいつてねえよっ、い、いいから飲んでみるよ」

あわてながら言うトンパ。ここまでくりゃあ、確実に入ってんな。俺はトンパに追い打ちをかける。

「下剤入りジュースならいらねーよ」

言い放つ俺に、トンパは、弾丸のごとく逃げて行った。

「．．まさかほんとに入っていたとは」

俺の疑い深い性格、はじめて感謝したかもな。

「はあ．．．眠い」

試験開始まで寝とこ。

俺は近くの壁に寄りかかると、すぐさま眠りに就いた。

一次試験。その一

ジリリリリリリリリリリリリリリリ！！！！

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！？」

俺はいきなりなったベルに、驚き声にならない叫びをあげる。
びっくりした・・・・・・

「これより試験を開始します」

あ、サトツさん。相変わらずお髭がダンディ。
試験開始かあ。なんか緊張してきたな。

前はそうでもなかったけどな。
年ってとるもんじゃねえな

サトツさんがしゃべり終わり、集団が移動する。

やっと、試験開始か。

「おりおんざのーみぎかたにいかがやくー」

俺はのんきに歌を口ずさみながら、走っていた。

一見ゆったり走っているように見えるが、
一歩が大きい俺の走り方は、よく兄さんに「訳わかんなくなってるな」と
言われた。

「ねえ、お兄さん！」

後ろから声がする。ゆるーと振り返ってみると、満面に笑みを浮かべた少年がいた。

「俺のこと？」

一応、女なんだけど。

「うん！俺ゴン＝フリークス！お兄さん名前は？」

へえ、ゴン君か。いいね、純情な子、好きだなあ。

「俺は、ユキノだよ。気安くユキって呼んでくれ」

「うん！よろしくユキ！」

お互いに手を出し、握手をする。

...

「ゴン。もしかして、」

「ん、なんか言った？」

やっぱり違うよなあ。

「いや、なんでもねえよ」

怪訝そうに首をかしげたゴンだったが、何か思い出したように俺の手を引っ張り、後ろに駆けだした。

「え、ちょ、ちょお？！」

足がもつれて、誰かの胸にダイブしてしまった。

その誰かさんは、「うお」と言いながらも、受け止めてくれた。

「すみません・・・」

俺がその人から離れながら言う。

「大丈夫？ユキ」

「うん、大丈夫・・・」

ゴンは俺がぶつかった男・・・正しくは、青年とおじさんに向かって俺のことを紹介する。

「クラピカ！レオリオ！こっちはユキだよ！」

俺がちら、と二人を見ると、すごい勢いでそらされた。
なんでさ！

「おいゴン！そいつはトンパが危険だって言ってたじゃねえか！」

一瞬、耳を疑う。

「トンパ・・・？危険人物・・・？」

「ああ、言っていたぞ、ヒソカと同じような快樂殺人鬼だと！」

快樂殺人鬼だと・・・？俺が？

「俺は快樂殺人鬼じゃねえし！まず人殺しなんて普通怖くてできねーだろ！」

「え・・・？」

「だって、夜とか出てきそうじゃんか！取りつかれそうじゃんか！」

何が、とはあえて言わない。嫌いなんだよ、そういう奴！

「お前、それほんとか？」

レオリオが尋ねる。

「ああ、人を殺した事なんて一度も・・・」

ない。言いかけたところで言葉を飲む。

殺しただろ・・・自分を。

「ええい！とにかく、俺は殺さねーの！あいつと一緒にすんな」

ヒソカは嫌いだ。変態だから。

「そうだったのか・・・すまなかつたな」

「いやいや、分かってもらえればそれでいいんだ」

友達が三人増えました。

一次試験。その二

誤解が解けてから、俺らはすっかり打ち解けた。
いや、ほんとによかった。てか、トンパ．．
今度脅し．．げふんげふん。挨拶しに行かなくちゃねっ！

「おいコラガキ！それは反則じゃねえのか！」

レオリオが叫んだ。

これは有名なあのシーンじゃないか！
これは参加するに限るねっ

「なんで？」

キルアがきいた。

レオリオのこめかみあたりにうつすらと青筋が浮かぶ。
やっべえ、超うけるんですけど！

「これは持久力を試すテストなんだぞ！」

「でも、道具使っちゃいけないとは言ってないよ」

ゴンがいった。

「一本取ったねゴン君」

俺がにやにやしながら言っと、ゴンもにへっと笑ってくれた。
やばい、超可愛い。

「ねえ、君名前なんて言うの？」

俺が思い切って尋ねてみた。

「俺はキルア。あんたは？」

答えてくれるとは．．．地味に感動だ。

「俺はユキノ。ユキでいいぜ、よろしくキルア」

そういうと、キルアはゴンに話しかける。

「お前いくつ？」

「俺は今年で十二！」

「（同い年、ねえ）」

お、このやり取りは。

「やっぱり俺も走ろつと」

キルア、カツコよかつたな。

「おっさんの名前は？」

「おつさ．．．これでもテメえらと同じ十代だぞ俺は！」

「「「「うそおおお？！」「」「」」

俺も入りました。

やっぱりレオリオは老け顔でした。

だって、絶対兄さんより年上だよ！

俺は今年で16。兄さんとは、6歳違い。

よってレオリオは22より年上となるのだ（何キャラ）！

いつまでもいじられているレオリオの肩に手を置く。

「レオリオ」

俺が同情の眼差しを向けると、レオリオは

「ユキ、分かってくれるのか?！」

そんなレオリオとは裏腹の言葉を俺は口にする。

「年齢偽証は立派な詐欺だよ?」

それから30分間、レオリオは口をきいてくれませんでした。

一次試験。その三

もう何時間走ったんだろ。

ぶつちやけペース遅くて疲れてきた・・・。

楽な試験だけど精神的にはつらいよな。

「はぁ・・・。」

「なぁユキ大丈夫？」

「なんか疲れてるみたいなんだけど」

「気疲れとペースが遅くて逆に疲れた」

「あーそれわかる！」

「じゃあさ一番前まで行こうぜ」

そういつてゴンとキルアはスピードを上げた。

もちろん俺も置いて行かれないのでペースを上げましたよ。

一人ぼつちは嫌いだ。

そしていつの間にか一番前にまで来ていた。

「階段とかめんどくさ」

「だな。しっかしハンター試験って結構簡単かもな」

まあ今のところただ走ってるっただけだしな。

これだけで受かるなら楽なんだけど。

この後色々面倒くさいんだよなー

本当やんなっちゃう。

「ねえところでキルアはなんでハンターになりたいの？」

「は？俺？・・・別にハンターになりたくなんかないよ。ものすごく難関だって言われてるから面白そうだと思っただけさ。でも拍子抜けした。ぜーんぜんつまんねーし」

本当今思うとすごい子どもたちだよな。

ヒソカが気に入っちゃうのもわかる気がしてきた。

あつ俺とあの変態と一緒にすんなよ！

ヒソカは嫌いだ、変態だから。(二回目)

「ゴンは？」

「俺はね、親父がハンターやってるから。親父みたいなハンターになるのが目標だよ」

「キルアとは違ってまともな理由だね」

「ユキ・・・それじゃまるで俺がまともじゃないみたいじゃねーか」

「まともな人は暇つぶしだなんていいません」

「あはははは！」

ハンター試験を暇つぶしとか・・・

本当天才はちげーな

つか爆笑のゴンかわい・・・

「で？ユキは？」

「へ？俺？」

「そーだよ。ユキだけ言わねーとかずりーよ」

ちよつとふてくされるキルア

おいおいお姉さん暴走しそうだぜ

かわいすぎだろこの子ども組

キャラ崩壊して胸キュンキュンしそうだ

「俺はライセンスあつたほうが色々と生活に便利だから・・・かな？」

「かな？つて・・・自分のことだろう？なんで疑問形なんだよ」

「いやぶつちやけ俺もあんまりちゃんとした理由ないかも」

「じゃあ人のこと言えないじゃねーか！」

「いやキルアよりはまともだとおもうよ」

「んだとー！！」

本当試験中なのにすごく和むこの空間。

メインキャラに絡む気なかつただけだな。

なんかほうつておけないし、何よりこの絡みが心地よい。

久々に孤独感を味合わずにいられるな。

そしてなんやかんややっているうちに出口から光が差し込んだ

一次試験。その四

「うおう、眩しい」

暗かった地下から一変して、湿原へ。
外に出ると、太陽がさんと照らしていた。

「やっと地下から出られたぜ」

皆お疲れのようだ。

そりゃあ、無理もねえな。原作知ってた俺でも結構つらかったんだから。

さつきから、ヒソカのねつとりとした視線がづらい。
前に、仕事で知りあって目付けられたんだよなあ。

「嘘だ！そいつは嘘をついている！」

突如響いた声。

それは怪我だらけの男からだった。

なんか長ったらしく理屈こねてるけど、
矛盾しまくりだ。

それよかてめえ、俺のサトツさんにけち付けやがったな。
でも、偽物の言葉を信じてる奴もいた。

あ、レオリオ。

なんか笑えてきた。

俺は一生懸命こらえるが、とうとう吹き出してしまった。

「だはははははっ！な、なに言ってやがんだよ！ひやはははは！超受けるんですけど！矛盾しまくりだっつーの！！」

だははと爆笑する俺を、冷たく見つめるキルア。

偽試験官は、顔を赤くして、且あわてていう。

「ど、どこが矛盾しているというんだ！」

ようやく笑いがおさまってきた俺は、手を口に当て、説明を始める。

「よく考えてみるよ、人面猿ってのは、貧弱なんだろ？それなのにサトツさんは息も切れてないし汗もかいてない。猿には不可能ってわけだ」

周りから、そっぴやそうかも、といった声が聞こえてきた。偽試験官の顔はだんだん青くなってくる。

「それに、」

俺はにこっと笑い、止めをさす。

「何で生きてる猿を連れてるのかなあ？」

言い終わると同時に猿と偽試験官にトランプが刺さった。

「ありやりや・・・」

ヒソカのトランプの餌食になった一人と一匹を一瞥し、
俺は動き出した集団について行った。

一次試験。その五

湿原に入り、俺はゴン達と別れ、一人で行動していた。

『だあああつ！お前達うぜえ！』

マチボツケとかジライタケとかサイミンチョウに行く手を阻まれること数十分。そろそろ我慢の限界らしい俺は手を高く振り上げた。

「つてえー！ー！！！」

『おっさんの叫び声？…チツ、アイツか』

おっさんの叫び声が遠くで聞こえ振り上げた手を下ろし直ぐ様元来た道を走り出す。

『（何であいつは大人しくしてらんないんだ。面倒事増やすな死ね）
』

色々な苛立ちが混ざって今にも爆発しそうな気持ちを必死に押さえ込み血の臭いが濃いところへ向かう。まあ、原作知ってるが、仕事だから、一応行こう。

「うん！君も合格。いいハンターになりなよ。一人で戻れるかい？」

コクリと頷いたゴンから離れたヒソカは何故か気を失ってるおっさんを肩に担いで姿を消した。俺は膝から崩れ落ちたゴンを遠くから一瞥しヒソカの後を追った。

「…キミはいつまで尾けて来る気だい？」

『やっぱりバレてた？』

こちらを見ずに言われおっさんを肩に担ぎながら走るヒソカの横間で走る。ちらりとヒソカを盗み見ると機嫌がいいのかにこにこしている。

『俺の仕事増やすようなことするなよ』

「だってあまりにタルいんだもん。選考作業を手伝ってやろうと思っ
つてね」

『受験者の中でお前と同等または上の奴なんて俺とあいつだけだろ
こいつの可否基準が全く理解出来ない。ゴンが合格なのはわかるが
気絶してるおっさんを何故合格にしたのか少しだけ気になる。』

『…っと、やっと着いた。んじゃ彼は預かってくよ』

二次試験会場らしき場所に着き俺達は足を止めた。ヒソカからおっ

さんを受け取り近くの太い木まで引き摺る。

「相変わらずだなあ、ユキは。くくっ、そこが可愛いんだけどね」

舌なめずりをしてそんなことを言っていたなんてもちろん俺は知らない。

二次試験開始まで。その一

俺はレオリオが入る木の下で二次試験が始まるまで待っていた。

「ふう．．．」

暇すぎる。することない。

さっきまでレオリオで遊んでいたのだが、いい加減あきてケータイをいじっていた。

ジンからの着信服歴が275件。
仕事の依頼が7件入っていた。

つーか、ジンどんだけかけたんだ。

俺が悩んでいると、手に持っていたケータイが震える。
誰かと思いいてみれば、案の定ジンだった。

「もしもし」

『っユキか？何度かけたんだぞ』

「試験中だったんだよ、てかかけすぎだつーの」

『しょうがないだろ、心配だったんだから』

「ふーん。じゃっ！」

『あつてめっ、切るな』

ジンが何か言っていたが、無視して切った。

どうせ危ない奴は即ぼこれとかしかいわねーもん。

するといいタイミングでゴン達が駆けてきた。

「ユキつよかった、ちゃんと合格してたんだね！」

ゴン、君はさっきまで変態と直面してたって言うのに・・・
俺の心配までしてくれるなんて、なんていい子なんだ！

「ああ、大丈夫だよ。というかレオリオはどうしてこんなことに・・・
」

知ってるけど（笑）

「そうなんだよ、俺も覚えてねえんだよな」

「うおう！？」

絶対に寝ていると思っていた俺は、下から聞こえた声に
素っ頓狂な声を上げる。

「ユキ・・・」

「クラピカ、そんな目で見ないで」

憐みの目で見てくる、クラピカ。

そんな目で見られたって、いたたまれないから。

「というより、何で中に入っていないのだ？」

「ああ、それは」

入れないんだよ、そう言おうとした俺をさえぎり、
銀髪美少年もといキルアが言う。

「入れねえんだよ」
「キルア！」

ゴンはキルアを見つけ、うれしそうだ。
二人で話し始めた二人を見ていたら、レオリオに話しかけられた。

「なんだ、羨ましいのか？」

にやにやしながら言ったレオリオ。

「いんや、若いっていいなと思って」

「ユキ。お前は幾つだ？」

「十六だけど」

言った瞬間、四人が固まる。あ、タイムストップとかは使ってない。

「え．．何さ？」

「いや、13ぐらいだと思ってたから」

「ははは、俺3つも若返ってたか」

身長大分伸びたと思ったんだけどな．．
地味に悲しい。

そんなこんなしているうちに、12時になり、
ドアが開いた。

さあ、二次試験スタートだ。

二次試験。その一

重々しい扉が開くと脚を組んで椅子に座っている美人試験官のメンチとその後ろで腹を空かせためちやくちゃデカい大男のブハラがいた。

『（あの獣が唸ってるような音ってあの人のお腹の鳴る音だったのか…）』

じーっとブハラさんを見てるとまた背後から微かに殺気を感じた。ちらりと見ればヒソカが2人に殺気を放っていた。何をしているんだあの馬鹿は。

「どお？おなかは大分すいてきた？」

「聞いてのとおりもーぺこぺこだよ」

「そんなわけで二次試験は料理よ！！美食ハンターのあたし達2人を満足させる食事を用意してちょうだい」

まずはブラさんが指定する料理を作りそれに合格した人だけがメシの指定した料理を作るとというのが二次試験の内容。そんなブラさんのメニューは「豚の丸焼き」だそうだ。

「森林公園に生息する豚なら種類は自由！それじゃ二次試験スタート……」

スタート開始の合図がされたと同時に受験者は一斉に森の中へと駆け出した。俺も森に向かおうと後ろを振り向けば少し離れたところでヒソカがにんまりと笑って手招きしてるのが目に入ってしまった。

『（見なきゃよかった。何であいつ俺の目に入る場所に立ってんだよ）』

大きな溜め息をついてゴンとクラピカ、レオリオの元から静かに離れた。

「オレ達も早く行こうぜ……ってユキは？」

「あ、本当だ。でもキルアもないし大丈夫じゃない？」

「レオリオは人の心配より自分の心配をした方がいいのではないかな？」

「てめっ、どいう意味だよ！？」

「まあまあ……」

そんなこんなで、ゴン達も豚を捕獲するために会場を出た。

二次試験。その二

「……何で俺がお前の為に力使わないといけないんだよ」

「そのかわりボクがユキの分の豚も取ってきてあげたじゃないか」

「ぶつ叩いて豚2頭取ってくんのと豚2頭焼くのどっちが大変だと思ってるんだよ」

ぶつぶつ文句を言いつつヒソカが取ってきた2頭の豚をこんがりと焼き上げる。

普段焼き尽くしてばかりだから焦がさないように調節するのは少し難しいことがわかった。

「ほい、出来上がり。さっさと持つて行くぞ」

「ユキがいてくれて助かったよ」

「キモいこと言うな死ね」

にやにやしながら豚を受け取ったヒソカに舌打ちをしてブラさんの元に向かった。

「うんおいしい！これもうまい！うんうんイケる！これも美味！」

「（豚の丸焼き70頭も食べられるなんて…あの人本当に人間か？）」

「あゝ食った食った。もーおなかいっぱい！」

「豚の丸焼き料理審査！！71名が通過！！」

「ブハラさんの食いつぷりに誰もが啞然としていたらメンチはドラを鳴らし試験終了の合図をした。」

「あたしはブハラとちがつてカラ党よ！！審査もキビシクいくわよ！。二次試験後半、あたしのメニューはスシよ！！」

「（スシか…最近全く食べてないな）」

二次試験。その三

「…何ジロジロ見てんだよ」

「スシがどんなものか知ってそんな顔してるから」

「修行時代に師匠と食べに行ったことあるんだよ。言っとくけどお前に教えるつもりはない」

頑張れよー、と手を振り一人静かに外に出る。スシよりも先に仕事をやらなければいけない。

「サトツさーん、ちょっといい？」

「どうかしましたか？そういうえば、ユキさんは、ライセンスは持っていたのでは？」

「え、あれ？まさか会長に聞いてない……みたいだな。ったくあのクソジジイは…」

どうせ面白そうだとか面倒だとかで何も伝えてないんだろう。とな

ると他の試験官にも俺のことは伝わってないと考えた方がよさそう
だ。

「実は俺依頼でここにいるんだ」

「依頼、ですか…一体どんな？」

とりあえずサトツさんに依頼内容を大まかに伝え
紙切れを渡し後のことは任せてスシ作りの為魚を調達しに行こうと
一歩前に足を踏み出したその刹那、

「魚ア！？ここは森人中だぜ！？」

「声がでかい！！川とか池とかあるだろうが！！」

いやいやお前も十分声でかいから、と心中で突っ込みを入れながら
改めて魚の調達に向かった。

「…なーんか嫌な予感しかないんだけど」

二次試験。その四

「あら、あんたが一番なんて意外だわ」

「……もしかしてメンチ俺のこと忘れた？」

「は？あたしあんたに会ったことないわよ？」

「いやいやいや、あるから。普通に会ったことあるから」

と言うのが会ったことあるのは俺であって俺じゃないから知らなくて当然なんだけど（変装してるから）。

取り敢えずそれは置いといて俺は作ったスシをメンチに渡した。

「……タネは筋目に対して直角に切れてるし、シャリの握り具合もいい。素人にしちゃあ中々出来てるじゃない。109番合格よ。あんたはここに座ってなさい」

「ういーっす」

「！今の…まさか」

にこりと笑って少し声のトーンを高くするとメンチは気付いたのか目を見開いた。

「あんた…まさかユキ…？」

「おー、久しぶりだな。今ので気付いてくれなかったら多分俺泣いてたぞ」

冗談だけど、と言おうと口を開いたがメンチにいきなり抱き着かれた。

「うお！？ちょ、メンチさーん？苦しいから出来たら離れてほしいなーなんて…」

危つく舌を噛むところだった。なんて思いながら首に巻かれた腕が締めまり息苦しくなりメンチの背中を軽く叩く。

二次試験。その五

「全然連絡くれないから心配してたのよ！」

『ゴメンゴメン。仕事が忙しくてさ』

「だからって何ヶ月も音信不通にならないでよ」

そんなこんなで暫くメンチの話を聞いていると自信あり気な顔をしたレオリオがスシを持って来た。

「出来たぜー！！オレが完成第一号だ！！」

「残念だけど第一号は彼よ。……って食べるかあっ！」

「（おおぅ、さすがにきついよこれは）」

それからスシと言えるようなものは出て来ずメンチの苛立ちは募っていくばかり。

そして先程から人の作ったやつに対して笑ってたハゲが持ってきた。

「ダメね、おいしくないわ!」

「な、なんだとー!? メシを一口サイズの長方形に握ってその上にワサビと魚の切り身をのせるだけのお手軽料理だろーが! こんなもん誰が作ったって味に大差ねーべ!?」

「(コイツバカだ。完璧バカだ) なあブハラさん…」

「これはマズいね…」

すぐ隣でハゲを怒鳴りつけるメンチを見て俺達は大きな溜め息を吐く。

ハゲの所為でスシの作り方が受験者達にバレて次々とスシを持って来るが完全に頭に血が上った

メンチの審査はとても厳しく合格者は出ないまま、

「ワリ!!! おなかいっぱいになっちった」

第二次試験

合格者 1名

二次試験。その六

「テスト生の中に料理法をたまたま知ってる奴がいてさー、そのバカハゲが他の連中に作り方をバラしちゃったのよ」

合格者は1人だと審査委員会に電話しているメンチは相変わらずイライラしていて口調が荒々しい。

「とにかくあたしの結論は変わらないわ！二次試験後半の料理審査合格者は272番一人よ！！」

「まさか本当にこれで試験が終わりかよ」

「冗談じゃねーぜ……！！」

「（その気持ちはわかるけど俺に殺気を向けなくてくれ）」

ドゴオオン！！

突如鳴り響いた音の方に顔を向ければ青筋を浮かべ殺気立っている

デブがテーブルを叩き割っていた。

「納得いかなエな。とてもハイそうですか、と帰る気にはならねエな。つーかテメエその女に甘い言葉囁いて合格させてもらったんじやねエのか！！？」

「……………は？」

「オレが目指しているのはコックでもグルメでもねエ！！ハンターだ！！しかも賞金首ハンター志望だぜ！！美食ハンターごときに可否を決められたくねーな！！」

俺を指差して甘い言葉だのと言ったデブは直ぐにメンチに向き直りともんでもないことを言い放った。

意味のわからないことを言われるし知り合いを悪く言われるしでとうとう堪忍袋の緒が切れた。

「…黙って聞いてりやグチグチうるせエんだよ。美食ハンターごときだア？ざけんじゃねエよ。ハンターでもねエデブがシングルの称号を持つメンチを侮辱するな。それに自分が合格出来なかったからって俺に当たってんじゃねエよ。ハンターになるなら凡ゆる知識身に付けとけクソデブ。しかも何キツチン破壊してんだよ。食べ物無駄にすんな。」

「テ、テメエ…ぶつ殺してやらア!!」

先程の言葉が気に入らなかつたらしいデブは俺目掛けて殴り掛かって来た。

「強気な奴は嫌いじゃない。だけど、」

ドカツ!!!!!!

「お前みたいな奴は嫌いだ」

拳を躲して人差し指で額を弾けばデブは勢い良く飛んでいき壁を突き破って外までふっ飛んでいった。

「（速い…オレでも全く見えなかつた!）」

「はは、あんな大口叩いてたクセにザマアねエなア？次俺の知り合い侮辱したら殺す」

聞こえてるわけないんだけど。
デブ同様殴り掛かろうとしていた奴等に伝えておく。

苛立ちを抑えるようにテーブルに置いてあるお茶を飲む
それでもいらつきがおさまれなかった俺はコップを片手で握りつづ
す。

受験者の顔が青くなる。
メンチにギロリと睨まれた。

「余計なマネしないでよ」

「だって試験官が受験者に手エ出したらマズくないか？殺る気満々
じゃん」

「ふん、まーね。賞金首ハンター？笑わせるわ！たかがデコピン一
発でのされちゃって」

メンチは立ち上がり後ろ手に隠していたかなり長い包丁をクルクル
と数回まわしてから
宙に投げそれを片手で取る。

「ハンターたる者誰だって武術の心得があって当然！！武芸なんて
ハンターやってたらいやでも身につくのよ！あたしが知りたいのは
未知のものに挑戦する気概なのよ！！」

「それにしても合格者1名とはちとキビシすぎやせんか？」

突然上空から声が聞こえ受験者達は慌てて外に出る。

そして上を見上げるとハンター協会のマークがある飛行船が飛んでいた。

「（会長直々にメンチを説得に来るとは…一体何考えてんだ？）」

遙か上空から躊躇いもなく飛び降りて来たかなり年をとったじいさんの足は何ともないらしい。

「（何者だこのジイサン）」

「（てゆうーか骨は！？今ので足の骨は！？）」

ざわめく受験者達にメンチが

「審査委員会のネテロ会長ハンター試験の最高責任者よ」と告げた

瞬間、受験者達は緊張で固まる。

「ま、責任者といつてもしよせん裏方。

こんな時のトラブル処理係みたいなもんじゃ（チチでけーな）」

「（今変なこと考えただろこのエロジジイ）」

俺は分かったが、緊張しているメンチは会長が何を思ったのかは分からなかったようだ。

試験の合否について問われたメンチは審査員を降りると言ったが、実演参加するという形で再試験が行われることに纏まった。

再二次試験。その一

そして飛行船に乗って着いた場所はマフタツ山。下を覗けば流れが早い川が流れている。

「安心して下は深い河よ。流れが早いから落ちたら数十km先の海までノンストップだけど。それじゃお先に」

「マフタツ山に生息するクモワシ。その卵を取りに行つたのじゃよ。クモワシは陸の獣から卵を守るため谷の間に丈夫な糸を張り卵をつるしておく。その糸にうまくつかまり一つだけ卵をとり岩壁をよじ登って戻ってくる」

受験者達は俺と同じように谷底を覗いた。

予想以上の激流に立ち竦む者も少なくない。クモワシの卵を取ったメンチは

攀じ登って上がって来た。

「この卵でゆで卵を作るのよ」

「（……簡単に言ってくれろぜ。こんなもんマトモな神経で飛びお
りれるかよ！！）」

「あーよかった」

「こーゆーのを待ってたんだよね！！」

「走るのやら民族料理よりよっぽど早くてわかりやすいぜ」

谷底を覗いて顔を青くさせるデブの隣でゴン達は躊躇いなく谷底に
飛び降りていった。

それに続いて他の受験者達も飛び降りていく。

けれど後ろを振り返ってみればまだ何十人も受験者達は残っている。
恐らく、というか確実にここでキブアップだろう。

「残りは？ギブアップ？」

「やめるのも勇気じゃ。テストは今年だけじゃないからの」

「（あの日から、俺の志願は美食ハンターだ！、とかいつちやって
ー）」

俺はそんなことを、ゴンに卵をもらい、メンチに言いくるめられた

デブを見ながら
思っていた。

三次試験まで。その一

「残った43名の諸君にあらためてあいさつしとこうかの。
わしが今回のハンター試験審査委員会代表最高責任者のネテロである。」

本来ならば最終試験で登場する予定であったがいったんこうして現場に来てみると

なんともいえぬ緊張感が伝わってきていいもんじゃ。

せっかくだからこのまま同行させてもらうことにする」

「次の目的地へは明日の朝8時到着予定です。」

こちらから連絡するまで各自自由に時間をお使い下さい」

会長とマーメンが部屋から出て行くと緊張の糸が解けた受験者達は目的地に到着するまで各々自由に時間を潰し始めた。

クラピカとレオリオは疲れたらしく周りに気を配りながらも各仮眠を取っている。

そんな中ゴンとキルアは飛行船の中を探検しに行った。（誘われたけど丁重にお断りした）

ネテロ師匠のボールを取るのは俺も二年かかった。もうこりこりだ。

「ねエ、今年は何人くらい残るかな？」

「合格者ってこと？」

「そ、なかなかのツブぞろいだと思うのよね。一度ユキ以外落としたってこう言うのもなんだけどさ。サトツさんどお？」

「ふむ、そうですね。新人がいいですね。今年は」

あ、やっぱりー！？とテンションが上がっているメンチを横目にテーブルに並べられた料理を口に入れる。流石ハンター協会だ料理が美味い。

「ユキノはどう？」

「俺は405番と99番がいいと思う。後はあのハゲもいいんじゃないか？ブハラさんは？」

「そうだねー、新人じゃないけど気になったのがやっぱり44番かな。」

メンチも気づいてたと思うけど255番の人がキレ出した時一番殺

気放つてたの実はあの44番なんだよね」

デブがキレて俺がデコピンしたときは今にもこっちに向かって来そうなほど殺気立っていたのはヒソカだった。

「抑え切れないって感じのすごい殺気だったわ。

でもブラハ知ってる？あいつ最初からあだったわよ、

あたしが姿見せた時からずーっと。あたしがピリピリしてたのも実はそのせい。

あいつずーっとあたしにケンカ売ってたんだもん」

「それサトツさんの時もそうだったよな。

ここにいる全員強いから問題ないだろうけどあいつは快樂殺人中毒者だから気をつけた方がいい」

「ええ、そうですね。彼は我々がブレーキをかけるところでためら
いなくアクセルを

踏み込むような異端児のようですからね」

「（異端児か…）」

その言葉を頭の中で繰り返しながら最後の一口を口の中へ放り込む

「ご馳走様でした。一応受験者だし試験内容聞くわけにもいかないからそろそろ戻るよ」

メンチが何やら言っているが気にせず部屋を出る。

男ばかりのむさ苦しい部屋にいたくないので夜景が見える窓の側にあった長椅子に座った。

「いい加減出て来い」

「よく気付いたねユキ」

「当たり前。てかイルミ・・・ああ、ギタラクルだっけか」

顔面に無数の鉾を刺しているギタラクルは音もなく俺の隣に座った。

「キルアって銀髪の奴お前の弟だったよな？なあにー？もしかして弟君が心配になって来ちゃった？」

にやにやしながらからかうように言えばギタラクルはぴくりと反応した。

もちろん俺にしか分からないくらいのものだが。

．．．原作知識ありって便利だなあ

「そんなわけないだろ。次の仕事上必要なだけ。ユキは？」

「なーんだつまんないの。俺はちよつと…仕事？」

「…訊いてるの俺なんだけど」

「細かいこと気にする男はモテないぞ。…あ、そーいえば久しぶりだな！元気だった？」

「（今更．．．？）」

「イルミ？」

「……見ればわかるでしょ」

「顔面に鋦ぶつ刺してる無表情野郎のどこをどう見ればわかんだよ…」

長い付き合いだし元気だということはわかるけど。

「（イルミいると落ち着く。やっぱり好きだな）」

今頃キルアとゴンは師匠とボール遊びしてんだろっな。

「.....」

キルアの暗殺術見てみたい気がする。

三次試験まで。その二

「あれ、ユキどこいくの」

「ちょっと探検してくる」

やっぱりいてもたってもいられなくなった俺は、イルミと別れてゴン達のところに行くことにした。

「迷子にならないでね」

「イルミは俺をいくつだと思いで？」

あれから十分後。

「嘘嘘嘘うそ．．．！」

見事に迷子になりました。

引き返そうとしても、どっちから来たか分からず。

．．．ん？念を使えばいいだつて？

その時の俺はパニックつて、そんな発想もできなかったよ。

「はあ〜どうしょ．．．」

「何がだい？」

鳥肌が立つような、薄気味悪い声（全国のヒソカファンの方すみませんが、背後からする。

．．．思わず悲鳴を上げた俺は悪くないと思う。

「俺の背後に立つな」

「じゃあ、前ならいいのかい？」

「訂正だ。俺に近寄るな」

「それは無理だね」

そついうと変態は俺に一步一步近づいてくる。

俺はヒソカとの距離を縮めないように、一步一步下がっていたが。

そんなやり取りが、結局全力疾走となり、俺とヒソカが到着の知らせがあるまで、リアル鬼ごっこしていたのは言わずと知れたことだろう。

三次試験まで。その二（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。
レビュー、感想などどんどん書いてください。
中傷、荒らし以外なら、何でも受け付けています。

三次試験。その一

翌日、予定時間の8時を少し過ぎた頃無事三次試験会場であるトリックタワーと呼ばれる塔の頂上に到着した。

「ここが三次試験のスタート地点になります。

さて試験内容ですが試験官の伝言です。〔制限時間72時間以内に生きて下まで降りてくること〕

だそうです。それではスタート！！頑張つて下さいね」

スタートの合図をするとマーメンは飛行船に乗り込み飛んで行った。

どうやら外壁を伝い降りて行くのは無理らしい。

怪鳥に喰われている86番から視線を戻すと40人くらいいた受験者がいつの間にか

半分近くいなくなっていた。

「そこで雇見付けたんだけどユキも一緒に行かない？」

「（かなり人数減ったな…ここにいれば死ぬことはないだろうし俺

も行くか) うん、そうするわ」

ゴン達に元に向かおうと振り返り歩き出した…はずだった。

「うおっ！！！？」

「『『『『ユキ！！』』』』」

右足を踏み出し左足も前へ出そうとしたがガクリと身体が傾いた。
下を見れば足元に隠し扉があったらしく反応する間もなく穴の中へと落下して行った。

「あんなマヌケな声出すとか恥だ…！
というよりこんなことに対応出来なかったことの方が恥だ…っ！！」

「おいおいこの落下速度と高さは絶対死ぬだろ。
これ念使うか身体能力ずば抜けてないとやばいって！誰だよこんな
もの考えた試験官は！」

文句を言いつつ足にオーラを集め怪我ひとつすることなく着地する。

「（足地味に痛い…能力者じゃなかったら死んでたな。あ、一人死んでるし。うっわ色々飛び散っててグロ）」

血の臭いがした方に顔を向けると着地に失敗したであろう人間が死んでいた。

死体は見慣れてるけど目玉が飛びだし顔面ぐっちゃぐちゃでぶつちやけ気持ち悪い。

コツンと身体を足で蹴って台の上に置いてある手錠を手に取った。

「これをどうしろってんだ？」

その道は試練の道。君達にはいくつかの試練を受けてもらう。そこに置いてある手錠をつけ時間内に全ての試練をクリア出来れば合格だ。ただし手錠が外れたり切れたりしたら失格だ。それでは健闘を祈る！！

「だそうだけど？」

三次試験官から説明を聞き終わり陰に隠れ気配を消していた

奴の方に声を掛けるとそいつは静かに姿を現した。

「！…まさかお前と協力することになるとは思わなかったぜ」

「（ああ、あんときのバカハゲか）」

「俺はユキノだ。足引っ張るなよ」

「オレはハンゾーだ！ここだけの話だけどよ、オレ忍者なんだよ。
幻の巻物 隠者の書 を探……………お、おい話はまだ…！」

「もう試験は始まつてるんだ。お前の話に付き合ってる暇はない。
どうしても話聞いてほしいなら歩きながらにしるハゲゾー」

俺の右手とハゲゾーの左手に手錠を掛け顔を上げるとハゲゾーは落ち込んでいた。

あれかメンチに鬼のような形相で捲し立てられたときハゲハゲ言われて

トラウマにでもなったのか。…まあそんなこと俺の知ったことじゃないが。

扉が開き手錠に72時間で止まっていた時間が0に向かってカウントを始めた。

「よっし、さっさと行……うおわあっつ！……!?」

落ち込んでいたハゲゾーは扉が開いたと同時に何かを振り払うかのように走り出した……のは良かった。

「ちょ、テメ……何ヘマしてんだハゲ！！初っ端から足引っ張ってんな……！！！」

「わ……悪い！けど実際は足じゃなくて手首引っ張ってただけだな！」

「んなことどうでもいいんだよ！ふざけてんのか！」

扉の先に床がなくハゲゾーは落ちた。別にハゲゾーが落ちようと構わないが今俺達は手錠で繋がれてるわけで必然的に俺もその穴に落ちることになった。

三次試験。その二

咄嗟に左腕を伸ばし突起物を掴んで落ちることはなかったが
流石の俺も片腕だけで野郎一人を支えるのは正直辛い。

「おいハゲ！お前どうにかしろ！忍者なんだからどうにかしろ！」

「忍者…！よっしゃ、任せろ！」

忍者と呼ばれたことが嬉しかったのかハゲゾーは壁を蹴り俺を抱え
高く跳び上がり
取り敢えず向こう側に無事に渡れた。

「わざと落ちてみたんだが…」

「おーそうかそうかお前はそんなに俺に殺されたいのか。ん？」

「じょつ、冗談に決まってるだろ！さっさと次進もうぜ！」

につこりと笑っているがユキノの目は笑っていない。

「コイツあの44番と同じくらい…いや、それ以上にヤバイ。」

「コロコロ…」

「…ーい」

二次試験で255番をデコピンで吹っ飛ばしたときも今もオレですら身体が震える殺気…。
タダモンじゃねーな。

「コロコロコロ…」

「おーい、聞いてるかー？」

「っ！な、なんだ？」

「な、なんだ？じゃない。後ろ見ろ、うしろ」

「コロコロコロコロ…！！」

「後ろ…。っ！これヤバくねーか？」

「ヤバいな。このスピードだとあと数秒で俺達あのトゲ付き大玉に串刺しだな」

狭い下り坂を物凄い速さで走っているが回転の掛かっている刺付き大玉はどんどん加速していく。
普段なら硬で粉々にするか纏か堅でガードするんだけどハゲゾーがいるからそれは出来ない。

「コロコロコロコロ…」

「（そろそろ本気でやばいな）よし、決めた。悪いなハゲゾー」

「あ？っーかオレはハゲ……っ！？」

「少し寝てもらう…って寝かせてから言つもんじゃないか」

右手が拘束されてるからとてもやりにくかったが
何とか左手でハゲゾーの首に手刀を落とし直ぐ様肩に担いで後ろを
向く。

そして思いの外近くまで来ていた大玉に向かって息を吹き掛けた。
すると異常なほど冷たい冷気が辺りを包み込み一瞬にして凍り付い
た。

凍っている大玉に軽く触れれば澄んだ音が響き粉々に砕け散った。
キラキラと光るそれから視線を外し足元に移す。

「我ながら上出来だ」

しかし右も左も上も下も凍り付きマイナスの世界になった
ここにこれ以上長居すれば気絶したハゲゾーは永久に目を覚まさな
くなるだろう。

それでも俺は別に構わないが、今回はそうもいかない。

俺は仕方なく肩に担ぎ直し少し先にある扉まで歩みを進めた。

ハゲゾーを抱えているというハンデがあるにも関わらず

俺は順調に試練をクリアしていった。何度か捨てて行こうと思った

けど。

「おー、やっと最後の扉！」

ここに辿り着くまで色々なことがあり右肩が痛いし物凄く疲れた。ただ気を失っている奴が合格するのは気に入らないが手刀を落としたのは

俺だし諦めて勢い良く目の前の扉を開けた。

「最後の扉へようこそ。今からここにいる全員と戦ってもらう」

「戦い方は自由。その手錠を外しさえしなければ何をしても失格にはならない」

代表らしい囚人二人が一步前に出て説明をする。

手錠を外さなければ何をしてもいいなんてこんな簡単でいいのだろうか。

「つまりお前達を殺しても構わないってことだな？」

俺は少し挑発するように言う。

「オレ達を殺す？綺麗な顔して面白えこと言うじゃねーか」

「ここにいる奴全員は終身刑の凶悪犯罪者だぜえ？」

「兄ちゃんこそ死にたくなかったら今の内にギブすることだな！」

ざつと見て150人くらい集まってる囚人達は俺の発言にゲラゲラ笑い出し一気に騒ぎ出す。

「（地味にム力つくなあ、オイ）」

俺は大きな溜め息をついてハゲゾーを肩に背負いなおす。

「それじゃ始めようか」

腰を低く落とし、構える。

…俺は口端を妖しく吊り上げ試合開始を促した。

三次試験。その三

俺の足元には、さっきまでの囚人たちが倒れていた。開始と同時に手刀を首元に落とし、気絶させた。

それは、一瞬の出来事。

俺が誰にも劣らないと言えるもの。それは『スピード』。

嵐、台風、むしろ竜巻が通りすぎたあのようなだった。

君は、あの『紅い閃光』かい？

スピーカーから声がした。
何て名前だったかな。ポッキー？

「まあ、そう呼ばれてた時もあったかな。あ、ポッキーさん。
俺もう合格？」

リップだ。109番、294番合格！所有時間9時間37分！

その声とともに、重苦しい扉が開き、俺はそこに足を踏み入れた。

四次試験まで。その一

「おや、早かったじゃないかユキ」

ズザザザッ！

突然真横からした声に反射的に距離をとる

「そんなに過剰反応しなくてもいいじゃないかツレナイねえ」

「やかましい変態」

忘れてた…、三次試験通過第一号ヒソカだった…

指でコメカミを押さえながら俺はニヤニヤしているピエロを睨む

「くく…、いいねその目付きとってもそそられるよ」

ゾクウッ！

凄まじい悪寒を感じた俺は反射的に距離をとる。

「ユキはイルミと知り合いだったのかい？」

ヒソカはトランプを捌きながらいきなり俺に尋ねる

「なんだよ、知り合いだったら悪いのかよ」

「くつくつ…、しかも結構長い付き合いだって？」

に、逃げ切れない・・・しかも若干殺気が……

目を泳がせながら、ごまかしているといいタイミングでイルミが入ってきた。

素顔で入ってきたイルミの腰に抱きつく。

・・・ほぼ、タツクルだが。

「イルミ会いたかった……………！」

俺が泣きそうな声を出すと、イルミは心配したようにヒソカに殺気を向ける。

「ヒソカ、青い果実見つけたんだろう。そっちにちょっかいかけてなよ」

そう言ってイルミは針に手をかける

「青い果実は実るのを待っているんだよユキは既に熟しているし、色んな意味で美味しそうだしね」

ヒソカは舌なめずりをしてトランプを構える。

ワオ、お互い殺る気満々？

俺は二人から距離を取りつつ傍観を決め込む。

するとヒソカは肩を竦めてトランプをしまった。

「ここでキミと殺り合うのは後々面倒そうだからやめておくよユキは諦めないケドね」

そう言ってヒソカは壁に寄り掛かって座った

それを見たイルミも殺気を消して針をしまっ

「ユキ、大丈夫とは思うけどヒソカ変態だから絶対気を許したらだめだよ」

そう言い残してイルミも壁ぎわに歩いていく

「…気なんか許すわけないじゃん、貞操が掛かってるのに」

俺はため息を一つついて二人とは反対側の壁ぎわに腰掛ける。

ゴン達はラスト1分まで来ないから、それまで寝よう。

昨日は十分寝れなかったし。

俺は瞳を閉じて、ヒソカ対策に念のため円を広場中に張る。

「ヒソカ、俺が寝てる内に近づいたら殺るからな」

一応そう釘を刺して俺は「破壊方式」（俺の愛刀）を握り締めた状態で眠りに落ちる。

向こう側から聞こえてきた「残念」とかいう言葉は 空耳ということにしておいた。

四次試験。その一

「残り1分です」

アナウンスを聞いて俺は眼を開ける

「…さすがに丸3日も寝るとかえってキツイなあ」

コキツと首を鳴らして立ち上がる

それと同時に前方にあった出口が音をたてて開いた

「あ！ユキも通過してたんだね！」

扉から出てきたゴンが俺に気付いて駆け寄ってくる

「うん、俺のルートは楽なヤツだったから。ゴン達はボロボロだね」

時間一杯まで色んな罠に追い回されたんだよね？

服の汚れを軽く叩いてあげながら俺はみんなを見渡す

「コッチは仲間割れとかあってかなり面倒だったんだぜ」

「そーだぜ、まあユキがコッチに来てたらこんなに苦労はしなかっただろうケドよ」

レオリオはそう言って背後のトンパを睨み付けた

あゝ、そういえばいたなあこんなヒト

「ふうん、まあいいじゃん結果的にはみんな通過できたんだしさ」

こんなヤル気ないヒト相手にするだけ無駄だし。

レオリオは「そりゃそーだけど…」とブツブツ言ってるけどほつとこう。

塔の外に出るとなんかやらしい目付きの
パイナップルさん（リッポー……だよな）が立っていた

「諸君タワー脱出おめでとう。残る試験は四次試験と最終試験のみ」

あと二つか…長かったような短かったような…

「これからクジを引いてもらう。このクジで決定するのは狩る者と狩られる者」

タワー脱出順にクジを引くよう言われ、ヒソカの次に俺はカードを引く。

198番…ってハゲゾーが間違えてゲットするヤツだ。

よし、キルアが倒したところを漁夫の利といこう。

四次試験対策を立てながら俺はみんながクジを引いていくのを眺めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6478y/>

狩人物語

2011年11月23日13時48分発行